

数少ない飯能焼の古文書

飯能市立博物館 学芸職員 尾崎泰弘

かつて江戸時代後期から明治中期にかけて武蔵国高麗郡真能寺字原（市内八幡町）で焼かれていた陶器がありました。明治 21(1888) 年に発行された「大日本陶磁器窯元一覧」には「武蔵飯能焼」とありますので、「飯能焼」と呼ばれていたものと考えられます。

飯能焼の研究は戦前から行われ、戦後、詩人の蔵原伸二郎がその古美術的な価値を明らかにし、その評価を基に「双木本家飯能焼コレクション」が飯能市指定文化財になりました。埼玉県域では近世の窯業生産は低調であったため、飯能焼は飯能を特徴づける文化財といえ、当館でも平成 6(1994) 年度の特別展「幕末・明治の幻陶 飯能焼」で伝世資料を一堂に会しました。また平成 13 年度の特別展「黎明のとき一飯能焼・原窯からの発信一」では、飯能焼原窯の発掘調査や、東京都内や近隣で出土した飯能焼を中心に展示し、飯能焼の「モノ」についての研究はかなり進みました。

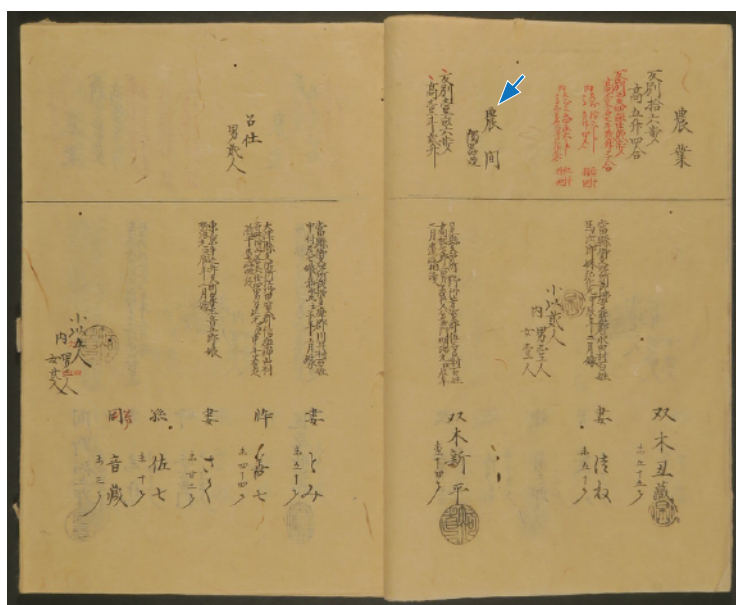
一方で大消費地である江戸を控えた飯能における地場産業としての位置づけや、その経営状況についての研究はあまり進展していません。それは同時代かそれに近い時代の記録（文書）がほとんど残っていないためです。一昨年、その真能寺村の名主家文書（双木利夫家文書）を整理し目録を刊行しましたが、ここではその中からわずかにあった飯能焼に関する史料を紹介したいと思います。

1 つが明治 4 年(1871) 年の真能寺村宗門人別帳で、この年に真能寺村で農間陶器焼をしていたのは、双木新平(54 才、下野国芳賀郡道祖土村＝栃木県真岡市出身)の家で、その忝善七(44 才)は信楽焼の産地である近江国甲賀郡信楽神山村（滋賀県甲賀市）出身であること、そして同村出身の一柳重五郎(40 才)は「農間陶器師」として記載されています。また、明治 8 年 2 月「物産取調書上帳」には、その前年に真能寺村で生産された土瓶・土鍋の売上げ代金は 400 円、生産量は 110 駄であったことも記されています。

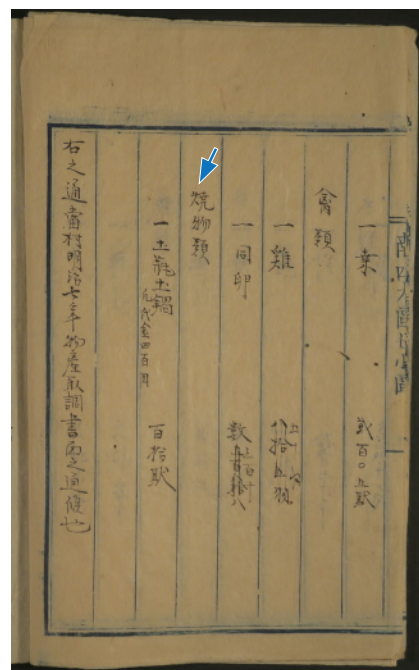
そのほか陶土を採取した赤根ヶ峠のある苅生村（市内大字苅生）の文書からは、真能寺村双木善七が明治 5(1872) 年 3 月から苅生村より陶器原土を採掘し、その量は 1 ヶ年で 360 貫(1,350 kg)に及ぶこと、釉薬は伊豆石の粉と紺屋の垂れ灰を 110:33 の割合で調合して作っていたこと（吉田稔家文書 No. 49「諸下書綴込」）がわかります。双木利夫家文書中には陶工の系譜に関する史料もありますが、文書からわかることはこのくらいしかないので。

【参考文献】

飯能市教育委員会『飯能の文化財 第 2 集（飯能焼号）』昭和 37(1962) 年 4 月
浅見徳男「飯能焼陶工の系譜」（『埼玉地方史』第 9 号、昭和 55(1980) 年 3 月）
飯能市郷土館特別展「幕末・明治の幻陶 飯能焼」図録 平成 6(1994) 年 3 月
同上「黎明のとき一飯能焼・原窯からの発信一」図録 平成 13(2001) 年 10 月



明治4年「真能寺村宗門人別帳」（双木利夫家No.953）



明治8年「物産取調書上帳」
（双木利夫家No.596）